

同志社創立 140 周年記念シンポジウム

「同志社創立 150 周年に向けてー同志社の歴史をどう語り継ぐかー」

## シンポジウム総合討論

本井：それでは始めます。

A：早稲田とか慶応と同志社の歴史が決定的に違っている一つに女子教育というウエイトがあると思うんですね。そういう意味で小林先生のご紹介の中に加えていただきたいと思うのは、津田塾と神戸女学院、ここも立派な百年史を作っているわけですから、津田塾、神戸女学院、それから少しタイプが違いますけれども、日本女子大学、東京女子大というものを加えた同志社百五十年史の見解を作っていただきたいなということがまず挙げられます。

北垣：女子教育のことを言ってらっしゃることは分かるんですけど、質問を縮めていうとどういうことになるでしょうか。

A：北垣先生のご提案された百年史への反省ということは十分よく分かるんですけども、この歴史の中に女子教育というのがあったはずなんですけれども、一言それが付け加えられてほしかった。

先ほどの繰り返しですけれども、慶応だと早稲田とは決定的に違う一つの点が、同志社の女子教育という側面もあると思うんです。それを加えていただきたいということです。

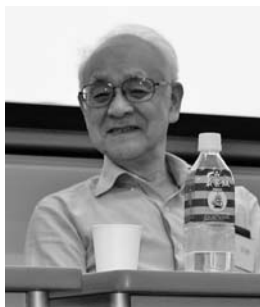
それから、小林先生の中に出てきたように、百年史の中で欠けているのは、確かに少し昭和戦時下のことに触れていますけれども、大きな課題ということにならなかったわけですね。やっぱり百五十年史では、第二次世界大戦中、戦後ということにもウエイトを置いていただきたいと思ったんです。

北垣先生、百年史の二つの弱点、ないし欠点にチラッと女子教育も付け加えていただきかったということです。

北垣：女子教育のことを付け加えてほしかったというご要望ですね。

小林：ありがとうございます。私もまったくおっしゃるとおりだと思いますし、参考にしてたものからまったくそういった視点を抜かしてしまいましたので、まったくおっしゃるとおりだと思います。失礼いたしました。あり

がとうございます。



北垣：耳が遠いため先ほどご指摘を正しく理解したかどうかは分かりませんが、アメリカの例が参考になるかもしないと思います。アメリカでは、今日、スミス・カレッジのことが磯さんのご発表で、分かったんですが、そのようにスミスとか、アーモストの近くでは、マウント・ホリヨーク・カレッジがありますね。そして、アーモストは男子の大学であったんですが、1975年から共学に踏み切りました。女子大学で共学に踏み切ったところがありました。ヴァッサー・カレッジがその一つだと理解しているんですけど、スミスもマウント・ホリヨークも共学化しないということを決断しました。

そういうふうな女子大学としてのアイデンティティーを堅持しながらいくという決意をした大学もあるのに対し、コネチカット川流域では、アーモスト、スミス、マウント・ホリヨーク、その他州立のマサチューセッツ大学アーモスト校、ハンプシャー・カレッジが共同して授業を取ることができるようにコンソーシアムを組んでおります。

だから、その関係がやっぱり同志社を考える場合にもあったと思うんです。同志社女子大学と同志社大学を合併するという話は一度も真剣に考えられたことはありません。同志社女子大学はアイデンティティーをずっと追求してこられたと思います。

どちらにも英文科があって、大学院もそれぞれあるわけです。そして、僕などは、女子大学の越智先生とか瀧山先生に授業していただきましたし、ヒバード先生の授業も受けたことがあります。そうやって教えることに関しては共通のチャンスをできるだけ活用しながら、しかし、教育という点ではキャンパスを別にして、隣同士ではあるけれども別にして、あまり喧嘩しないようにしながらやってきている、というのが同志社であるという気がいたします。

**B**：3人の先生のご発表を興味を持って拝聴いたしました。

小林先生は、非常に詳しく日本における私学有名大学の百年史、百五十年

史の進行状況についてご報告をいただきましたが、私はこの21世紀の日本にあって、私学の生き残る方法の一つは、その独自性を明確にしなが、併せてグローバルな教育研究がなされるということが必要だろうと思いますので、先生のご報告の中に、例えば慶応であるとか、早稲田であるとか、立教であるとか、そういう日本の私学を担ってきた大学は、どのように独自性を出しながら百五十年史をまとめようとしているのか、そういうあたりの補足をお願いをいたしたいと思っております。

それから水谷先生は、同志社の建学の理念であるキリスト教主義を強く意識しながらお話になったというように拝聴いたしましたが、もしもこの同志社において百五十年史を編纂されるということが近い将来委員会をつくり、各校の代表が出て検討されますときに、キリスト教主義をやはり柱にするということを強くおっしゃるでしょうか、あるいはおっしゃることを私は期待をしたいんですが、いかがでございましょうか。



小林：ありがとうございます。ひとつは、今最後のご質問の中にもありましたように、同志社の場合にはキリスト教主義というものがはっきりとございます。先ほどのご質問との関係でいえば、戦時下の動向とか、徴兵制との関係とかということ、これは社史資料センターの日常的な活動の中で、たとえば展示のテーマを検討する際にも常日頃から考えていることでございます。慶応や早稲田の事例などを見てましても、日常活動の中でもその大学の在り方とか精神、特徴ということを意識して活動されていると感じました。

ただ、それを日本の歴史、とりわけ近代史の中に位置付けるという形で、きちんと150年とか100年が描き切れているかということになりますと、それがこれからも課題になるかもしれません。たとえば慶応の場合ですとむしろ福沢諭吉という創立者を前面に出すというふうな形になっており、それが研究所の名前にも反映されているといえるかもしれません。慶応は、大学史事典とは別に、『福沢諭吉事典』というものも発行しております。早稲田の場合も大隈重信に焦点を当てた関係文書の発掘といえますか、本格的な資料

集の出版を行っています。これらの大学の場合には、創立者の顕彰にも一定の比重を置いていると聞いていいのではないかと思います。



水谷：同志社におけるキリスト教主義、これは創立者以来の根本原則です。ただ、課題は、キリスト教主義を標榜しながら、学校内にキリスト教信徒は少数であり、同志社の中でどのように、どういう仕方で新島のキリスト教主義が行き渡っているのかについて再確認する必要があります。

同志社のキリスト教主義、それをとりあえず私はキリスト教的人間理解に基づいて人を育むものであると理解しており、そのキリスト教の内実には素晴らしいものがあることを私は信じて疑いませんが、同志社のキリスト教主義を推進するためには常に啓蒙の運動が必要であると思っています。

この同志社のキリスト教は、19世紀後半のアメリカ、ニューイングランドのプロテスタント会衆主義教会（Congregational Church）の潮流を背景にしています。16世紀ヨーロッパ宗教改革に由来する会衆主義は教派性をあまり重視せず、現在は組織的ネットワークを持っているわけではありません。しかしもちろんのこと、このキリスト教の精神は新島襄のキリスト教理解の母体となり、現在もなお至るところに息づいています。それはともかく、私どものものの見方とまったく違うキリスト教もいろいろありますので、そういう意味の同志社のキリスト教について百五十年史編纂の際に留意する必要があります。

C：一つキリスト教主義とか、キリスト教思想ということもさることながら、教会を建てるといふ、教会という一つの、言うならば思想だけでない、あるいは精神だけでない、体である教会を建てていくといふ、そういう点が少し欠けるような感じを受けるんです。そのところは非常に難しい問題もあるので、教会という言葉が今日の理事長の口からあまり出なかったのも、そこのところもこの研究会で一つ押さえなきゃいけないことではないかなと思って発言させていただきました。

水谷：取りあえず分けるべきものと考えます。新島は英学校で教え、そして

キリスト教会の建設を志しました。教育とキリスト教会の二つを両翼として新島襄は活動しました。この両者の関係が歴史的にどうであったのか見定めておく必要がありますが、理念的には教育施設とキリスト教の信仰共同体である教会は次元が違うものです。

**D**：記念誌はデジタルで作成いただき、CD-ROM や Web 上で提供いただきたい。発行後の内容の修正とか、新しい発見がある場合、すぐにアップデートが出来るというメリットがあります。

さらに学び方についての道しるべ、即ちパスファインダー（特定のテーマに関する文献、情報の探し方・調べ方の案内）を添えていただきたい。こういう学び方や切り口があるのでないかという助言、付記があった方が良く考えます。

なお、事実データの他に見解の相違のある内容の場合には、あえて一本に絞らず、両論併記の形式で編集いただくのが良いと考えます。

**水谷**：一言、ご提案の内容は、小林先生から伺った方がよろしいかと思えます。良いご提言ありがとうございます。私が研究大学という表現で申し上げたかったのは、高等教育研究機関として研究者が活発な研究を続け第一線で活躍していくべき大学であるという意味合いで申し上げました。おっしゃったことはよく理解いたします。

**本井**：小林先生、レジメの最後のところでデータベース化ということをお書きになっていますので補足していただけますか。

**小林**：ありがとうございます。私もちょっと申したつもりだったんですが、要するに、今事実だと考えられていることでも誤りが見つかることがありますし、新しい事実が発見されることもありますので、今おっしゃった点で、まずは研究のために素材を提供するということと、それらをいつでも更新できるようにし、情報を新たなものにしていくことはたいへん大事なことだと思っております。ただ、それは社史資料センターの日常の業務としては常に心がけなければならないことなのですが、そのことと記念出版という形で見えるものを作るということをどのように関連づけ、組み合わせるかというご意見だと思います。ありがとうございます。そのあたりを、社史と 150 年の記念事業との間でどのように関連づけていくか、私としましても考えて

いきたいと思います。



**本井**：ちなみに今教文館では、近代日本キリスト教歴史大事典の改訂版を準備しております。これは冊子体ではなくてデジタルバージョンで出るように聞いておりますので、10年後はさらにデジタル化が進んでいると思います。どういう形で出すかということ、これも一つの課題だろうと思います。ほかにございましょうか。

**E**：さっきの北垣先生のご報告の中にもありましたが、3人の先生に質問をさせていただきたいと思います。

通史の編纂、これはとても私は難しい課題だと思うんですが、歴史の編纂の意味でも難しいし、特にこの同志社の150年の歩みの中で、やっぱり激動の時代をくぐってきたわけですよ。激動というのは何か、やっぱり戦争なんですよ。新島先生は幸いっていったらおかしいですけど、日清戦争を体験せずに他界されましたが、あとに残された門下生をはじめ、同志社のご婦人たちは、やはり戦争の時代をくぐってきた。この戦争の時代をどう通史でとらえるかというとらえ方の問題はとても重要だと思います。

言葉遣い一つもそうなんですよね。今日もこのレジュメを見ていると、やっぱり日本が戦争に負けたというと、終戦というか、あるいは敗戦ということによって自分の立ち位置が分かるわけですよ、歴史を執筆する人の立ち位置が分かるわけです。そういった問題をどう扱うかということでない、しっかりとした戦争に対する価値判断を打ち出せないと私は思います。

そういったものを、用語がものすごく難しいんですよ、今用語の使い方が、侵略は使わないという日本政府の一つの方針ももう定着したような感じで、文部省の教科書なんかにも侵略という用語はできるだけ回避する、避けて通ると、進出にするという問題も出て、これは家永裁判にまでつながりましたけどね、そのへんの原則といいますか、通史を書く場合の原則というものを、これ、書いた人間の立ち位置の問題がはっきりすると思うんですよ。

それを自由にするのか、あるいは同志社大学として一つの統一した見解の下で用語を設定するのかということは前提としてやっぱり決めておく必要が

あるんではと思います。ものすごく難しいです、用語の使い方は。難しいと  
いって、これはなおざりにしておく問題ではないと思います。

**本井**：お三方を代表して、北垣先生、じゃあ。

**北垣**：戦争の問題は非常に大事であると私も思います。例えば、『同志社百年史』は、日清戦争のときに同志社がどのように行動したかということは何も書いてません。幸いに、太平洋戦争に関してはかなり書いています。

日清戦争に関して申しますと、明治 20 年代のはじめごろは、キリスト教は日本の国体に合わないということで非常に非難されていたんですね。だから、同志社の学生たちは、そうじゃない、キリスト者も日本を愛しているんだという立場を表明したくて仕方がなかったんです。

それで、日清戦争で旅順の陥落が迫ったときに、旅順が陥落したというニュースを同志社はいち早く伝えた。つまり、京都には同志社にそれが最初に伝わるように手を打ったんだそうです。そこで同志社の学生たちは大喜びで、旅順が陥落したことを街に出て宣伝したそうです。

キリスト教の同志社だけども同志社にも愛国心があるということを示したかったからです。そういったことを目ざとく宣教師たちが、ボストンの本部への報告の中に書いています。

僕は、今のご質問対して、太平洋戦争のときのことが百年史には出てくるんですけども、同志社に軍国主義者もいたに違いないわけですし、その人達対平和主義者の相克にまで詳しく渡っていないように思います。だから、百年史で太平洋戦争のときのことを書いた人は非常に困っただろうと思いますけれど、もしも百五十年史が書かれて、それを改訂するのであれば、やはり両方の面があったんだということのはっきりすべきであろうと思います。

教員の中にも末光信三先生のように平和主義を貫こうとして非常に苦勞した人もおれば、名前は言いたくないですけども、右翼としか思えないような発言をして、同志社のキリスト教を恥じて、国粹主義的に走ろうとした勢力があったに違いないです。それはもちろん例の岩倉の高商における柔剣道場に神棚を祭ったという事件に表れています。ああいったことをもう少し丁寧

**E**：その場合も立ち位置がものすごい問題になります。自分が書けても、世

界に向かって立ち位置がそこで問われるんです。

今はグローバル時代という、もう猫もじゃくしもグローバル時代と言ってもすけど、グローバル時代であればあるほど、これは日本の国内にだけ読者を求めるんじゃないに、世界に求める今度は百五十年史になると思うんです、世界が読む、日本以外の人も読むわけです。その場合に、しっかりとした概念を持って書くことが、その価値を問われる一つの物差しになると思うんですよね。

同志社というのはやっぱり国際主義の大学であって、研究機関であってということ問われたときに、グラグラとしないような、しっかりとした明確な立場を表明することが私は大事だと思います。日本だけが評価するんじゃないですよ、世界が評価するんですよ、世界の大学が評価するんですよ。

北垣：今のグローバルという言葉で思い出すんですけど、実は同志社が明治8年にスタートしたのは非常にグローバルな状況だったということを最近の研究が明らかにしているんですね。セルビア人の学者で A. M. コビルスキーさんという人がおまして、彼女は新島がラットランドでアピールをしたために5,000ドル集まった、あるいは彼女は3,500ドルだって最初言うんですけど、その事件を目して、あれはグローバルな現象だったというふうにとるんです。

つまり、その10年前にシリアのプロテスタント・カレッジの話があるんです。すでにアメリカン・ボードの保守派であるルーファス・アンダーソンという主事がいたんですけど、彼はアメリカン・ボードの宣教師は福音を述べ伝えたらいいのであって、学校教育に手を出すべきでないという考え方を非常に強く主張してきたんですね。

ところが現場に行った宣教師たちは、そんなことを言っていたら宣教はできないんだ、やっぱり教育に熱を入れざるを得ないんだということに気が付いたんですね。そこでボストンの本部の頭の硬い人たちを説得しようとして非常に苦心した。そういう歴史があったから、新島は知ってか知らずか、その後を受けてああいう演説したのでそれが受けたんだというふうに、グローバルな光を当てたんですね。だから、同志社の最初のスタートにグローバルな光を当てるといふ最近の研究の成果です。



だから、おっしゃるように、第二次大戦にもグローバルな光を当て、それから日清戦争、日露戦争にもグローバルな光を当てた百五十年史であってほしいと願っています。

水谷：用語の使い方は極めて重要で、神経を使うところです。個人に委ねてしまうのではなくて準備作業をする会議体で、表現を統一する方向で考えるべきだと思います。一般的に言えば、いろいろなニュアンスが付きまとった表現、概念、用語は避けて別の表現を使うのが良いと思います。要は、その事実を的確に表現すること自体が問題を指摘しているという書き方が適切と考えます。

**F**：水谷理事長にお聞きしたいんですが、『同志社九十年小史』、50年前に出た時代に学生だったんですけれども、あのときの『九十年小史』は非常に面白い読み物ふうのね、そしてその10年後の『五十年史』は、各組織の発展が中心でしたから記録としては非常に貴重なものだと思うんですね。

そういう観点から言えば、各組織体の発展を少なくとも記録に残すべきであると私は思います。いろんな観点があって、150年まで翻って書き出すと、これはもう10年ではとても大変なことであろうし、これは200年という長期発想の中で考えていったらいいと思うんです。その150年の事業の一番の目玉は、百年史以降の各組織の発展を記録に残すと、後の時代に残すという観点からやっていただければと思っておりますが、理事長はどうでしょうか。

水谷：百年史以前の事柄については加筆、修正、また追加しなければなりません。しかし、そこに集中するだけで百五十年史が成立するわけではありません。課題は、百年史以降の、まだまとめられていない事柄ですので、そこに精力を割かなければなりません。創立百年以降、今世紀に入って大学は14学部に膨れ上がり、小学校、国際学院も設置されました。大きな動きを見せた時期であり、社会動向としても東西冷戦の時代から南北問題、宗教間の軋轢へ、バブルがはじけるとか、リーマンショックとかいろいろございます。そしてこの時期には、情報の透明性の視点から公的な文書がずいぶん公開されるようになりました。それはウェブで見ることができますし、文書でも出ています。それらの膨大な資料をまとめて、そして百年史のような形で記述

する場合、どのような整理の手法があるのかということもあります。

**G**：一番肝心の良心教育ですね、これが私らの在学時代は宗教学という必修科目がありまして、そこでキリスト教とか、あるいは新島学についておおよそのことは習ったと思うんです。

ところが、この科目は学園紛争以降なくなっていると、それで週刊誌やったか何かにね、同志社の学生が、新島襄というのは何学部の教授ですかと聞いたと冷やかした記事もあったのです。そういうことでこの良心教育というのはもう途切れたんじゃないかなと。

それに加えて、大谷総長が、何かのスピーチで、まるで選挙のスローガンのように、良心教育、良心教育と、もうこの十年来言ってるんですね。この秋にホームカミングデーがありますけどもね、あのときに言うスピーチは、またこれ良心教育がどうのこうのというのに、いったい何考えているのかとしか言いようがないですね。これ、今同志社でいえば、良心教育というのはどういうふうになってるんでしょうか。選択なのか、必修科目なのか。

それから、こういう科目はね、経験の浅い若手の先生では、私は無理があると思います。やっぱり長年の研鑽を積まれたベテランの先生であって、はじめて良心教育というのは成り立つんじゃないかと思うんです。そういうことで、今良心教育、これがどういうふうに取り組まれてるんでしょうか。それによって、これから10年間のその成果は150周年に書いていただけるんじゃないかと思います。

**水谷**：大学には以前は「宗教学」がございました。現在は「建学の精神とキリスト教」という科目が全学に開講されています。学部によってはそれを必修にしていますし、履修学生の数は増えてきています。また、大学は教養教育の一貫として昨年から「良心学」という科目の提供を始め、今年になって「良心学研究センター」が立ち上がりました。もちろん、大学のキリスト教文化センター、女子大学の宗教部、さらには幼稚園、小中高それぞれで建学の精神に基づく人間教育がなされています。蓄積はたくさんございます。

課題となるのは、法人同志社の中に現在は4万3,000名という多くの幼稚園児から大学生・大学院生までの人たちが学んでいることです。この人たち全体に同志社の建学の精神を行き渡らせることの困難が眼前に控えていま

す。ともあれ、先ほど運動であると申しましたが、常に同志社というのはこういう学校ですよということを伝え続けていくことによって、同志社という私立学校の個性を学内にも、社会にも提示していかなければなりません。

本井：3人の先生方、皆さま、ありがとうございました。

(2015年8月8日開催／文責：編集委員会)

